

「いいだ未来デザイン 2028 前期計画の実施状況の概要」及び「2021（令和3）年度戦略計画」についての意見交換の内容

いいだ未来デザイン会議委員からのご意見・ご提案	ご意見・ご提案に対する回答
<p><基本目標1 稼ぎ、安心して働ける「魅力ある産業」をつくる></p> <p>【寛委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いいだ未来デザイン 2028 戦略計画【2021（令和3）年度】の「進捗状況確認指標」の「③粗付加価値額」の基準と目標が同じ数値なのはなぜか。 ・同計画の同項目の「⑮市田柿の出荷量」について、TPP の際、市田柿は柿に関する1品1ノミネートの中で選ばれてノミネートされている。また、神戸や札幌に行っても驚くほど高く売られており、ブランド品としてのニーズが極めて高い。市田柿にはもっと力を入れて取り組むべきである。人材が足りていないから生産が追い付いていないという現状に鑑み、人材を確保することにシフトした取り組みが必要とされているのではないか。 ・多くの課題のベースにあるのは人口問題である。明石市は、0歳から4歳児をいかにして増やすかにシフトして対策を打っているが、飯田市もターゲットを明確に絞って対策を打つべきである。シラク大統領は、如何に子どもを産み育てる環境を整えるかに重点を置いた政策により10年で合計特殊出生率は1.6から2.1に増加させた。政策によっては可能なことである。 ・国や県もそうだが、市も如何に先行投資をするかである。足元で危機的な財政状況になるような投資をしても、将来人が増えれば税収は増える。そういう発想をベースとした政策が必要ではないか。 ・飯田駅前プラザの整備に関しては、明石市の駅に設置された図書館のように、人を集めるためにはどうしたらよいか、魅力があり、人が来る場とはどのような場なのかを十分に考えていただき、側面的な支援をしてほしい。 ・世界の3大ミステリーは宇宙、深海、脳といわれているが、そうしたことにシフトした蔵書を揃えると画期的な図書館になるのではないか。 ・日本は世界で一番、人口に対する公務員の数が少ない。大変な中で仕事をしていると思うが、APUの出口学長がいうとおり、人・旅・本が新しく楽しい発想をする基盤となる。頭をフレッシュにして考えることをしてほしい。 <p>【北山委員】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いいだ未来デザイン 2028 戦略計画【2021（令和3）年度】の「当初予算」はいつの当初予算のことか。また、その詳細を確認するにはどうしたら良いか。ど 	<p>【串原産業経済部長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域経済の状況等から見込むのが難しかったため同数としている。 ・市田柿に関しては、特に取り出して計画し事業を進めている。 <p>【串原産業経済部長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・飯田駅前プラザの中には、図書館の機能もあり、主に高校生をターゲットとした蔵書構成にする予定である。また、XR室等のスタジオを準備するほか、高校生のたまり場となる勉強する場所が不足しており、そうした要素も取り入れながら整備することを考えている。 <p>【串原産業経済部長】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和3年度の当初予算を記載している。内訳や事業のボリューム、また、事業内容に関しては、事務事業進行管理表をご覧ください。該当部分の

のような事業に、どれくらいのボリュームで予算があるのかがわかると、事業のイメージが付きやすい。

- ・南信州の財産として農業産品がある。光植物工場など、天候に左右されないアグリビジネスの可能性を探っていくことで、若い人達の定着にもつながるのではないか。力を入れていく分野で、強みになっていく産業ではないか。
- ・林業もそうだがアグリビジネス分野は、長い目で見て育てていく産業であり、こうした分野こそ、企業版ふるさと納税等も利用しながら、民間と行政が協働する分野である。

【森竹委員】

- ・産業分野は、非常に守備範囲が広いが、商業者の視点から見ると、中心市街地が飯田市の核であり顔であるという考え方は重要である。
- ・中でも、動物園とりんご並木は極めて大切なラインである。動物園は無料ということもあるが、かなりの集客がある。また、並木通りをウォーキングロードとしてアピールするなどのアイデアもある。面と線を捉えたまちづくりを進め、中心市街地の良さをアピールし知っていただく必要がある。
- ・空き店舗については、起業家支援は重要な施策である。空き家を活用した起業に関しては、行政がいろいろな形で支援をしてくれているが、ボトルネックは地権者との交渉である。この部分に関しては、自治会や商店街の人たちが、協働の考え方のもとに起業が起りやすい環境を作ることが求められていると感じている。
- ・エス・バードに関して、利用者が多くなってきており良いことだとは思いますが地味である。小学校の社会見学等でアピールするなどの工夫が必要ではないか。また、東海村の原子力関連施設の試験室は年間スケジュールが埋まっている。エス・バードには、最先端でここにしかない検査技術があるので、それを活かし、「拠点は飯田だよ！」といえるような、代名詞になるようなものにしていけば、子ども達も関心をもち、いずれは帰ってきてくれるような流れが生んでいけるのかなと考えている。

【竹内委員】

- ・地域シンクタンクで研究をする中で、2050年には現状から3割減になるといわれる人口の減少に関する大きな課題を感じている。

事務事業進行管理表を資料提供させていただく。

- ・過去に光植物工場での生産に取り組んだ経過はあるが、時期が速かったのか規模の問題があったのかうまくいかなかった。一方で、技術革新等により工場での栽培の可能性が広がってきており、地域の中でそうした事業に取り組みたいという方がいれば、是非応援をしていきたい。
- ・企業版ふるさと納税に関しては、信州大学と協働した人づくりを進めている。
- ・農業分野では、現実的には多くの課題がありそう簡単な話ではないが、JAと行政が協働して初期投資をする担い手プロデュースを実施するなど取組を進めている。
- ・エス・バードについては、もっと知っていただけるようアピールしていく。
- ・順調に進み認証を受けることができれば、これまで、アメリカに行かないと受けられなかった検査が、飯田市でできるようになる。

- ・こうした状況下であっても、魅力のある商品を生産し、儲けることができる産業があれば、外からの人の流れも期待できるのではないか。市田柿もエス・バードもそうだが、もっと外に対してアピールすることに力を入れてはどうか。
- ・飯田市は、全国的に見ても子どもが少ないわけではない。大学進学等で飯田市を離れた若者が飯田に戻ってこないところから負のスパイラルが発生している。帰ってきたいと思わせる産業づくり、産業振興を進めていくことが重要である。
- ・粗付加価値については、もう少し高めに設定してもよいのではと思う。

【高橋委員】

- ・観光に関する評価指標はいろいろあるが、専門特化したものでは分からないので、現在設定されているとおり、全体的な人の流れを見るための天龍峡、遠山郷の入込客数、観光消費額を指標とし評価していく方向で良いと考えている。
- ・観光インフラという面では、大型ドライブイン2つが地域から撤退した。コロナ禍の影響も大きかったが、ビジネスモデルそのものが今の観光の在り方とうまくマッチしなかったことも原因かと推察している。
- ・観光公社では、地域の皆様のご協力をいただき、本物体験やSDGs等の視点を持ったプログラムを展開している。教育団体を中心に昨年・今年と参加者が増えてきているが、その際に、200人や100人で食事をするところがない状況となった。
- ・こうした状況下、既存施設を活用すべく、シルクプラザで結婚式や大型の宴会がなく空いている会場を使わせてもらい食事を提供いただく、或いは、まちなかの飲食店に協力していただき、まち全体をドライブインにしてしまうという取り組みを進めており、夏には筑波大学の附属高校が、この冬には修学旅行として地元の高陵中学校の生徒がまちなかドライブインを楽しむことになっている。
- ・知恵と工夫、デジタルの基本であるアナログを如何に鍛えておく、保っておくことが大切で、ものの仕組みを理解した上で、考えていかななくてはいけないと感じている。苦しい時に、本質を捉え、力を結集させて考えてやっていくことが、このコロナ禍で相当鍛えられたと感じている。
- ・出てきた数字の裏には、見えていないことがたくさん隠れているので、そうしたことも考慮しながら事業を進める必要があると思っている。

- ・粗付加価値額の算出に関しては、是非、地域シンクタンクのお立場でアドバイスをいただきたい。

【串原産業経済部長】

- ・ご紹介いただいたコロナ禍で使用していない既存施設を活用したドライブイン、まちなか分散型ドライブインなど、実際の現場を改めて見つめなおし、組み合わせや掛け合わせの視点で取り組みを進めていきたい。

＜基本目標2 飯田の魅力を発信し、つながる人を増やし、飯田市への人の流れをつくる＞

【佐々木（崇）委員】

- ・人材の誘導はとても大切だと考えているが、飯田市全体で取り組むのは規模が大きくて難しいと感じている。一方で、各地区独自で人を呼び込む取組も実施されており、個性があって魅力的だと感じている。飯田市全体が土台を支える中で、取組は各地区で個性を活かした方がよいと感じているが、そのような発想はあるか。

【森下委員】

- ・近所に埼玉県から移住してきた方がおり、話を聞いてみると、飯田の人の言葉は優しくて、人間が温かくとても住みやすいとおっしゃっていた。地域の人が声をかければ、移住されてくる方も地域に溶け込みやすいと思う。
- ・お子さんが小学校1年生ということで、最初は友達がいなくて学校に行くのを嫌がっていたが、地域の人が声をかけたり、近所に友達ができたりしたので、喜んで学校に行くようになった。

【福岡委員】

- ・前期計画の指標と比較すると中期計画の指標は数も増えて内容もよくなったと感じる。
- ・昨年度、石神先生から飯田は外部から見ると魅力的な地域だと発言があった。あえて人を呼び込む活動をしなくても飯田は今のままで充分魅力的だという話を聞きうれしく思ったところである。移住していただく方には飯田の文化を受け入れてもらいたいと思うので、まずは飯田の魅力を正しく発信して、きちんと理解してもらうことが重要であると考えている。

【下平委員】

- ・Uターン移住実績が4年間で累計339人とあり、Uターンが121人、Iターンが218人ということである。普通に考えればUターンが多いのが一般的だと思うが、なぜIターンの方が多くのかという分析はできているか。

【塚平市民協働環境部長】

- ・その通りだと考えている。丘の上や中山間地域など課題もそれぞれの地区で異なり、各地区で個性あふれる活動を展開していただいているところであるので、飯田市として各地区の支援をしつつ情報発信にしっかり取り組む必要があると考えている。

【塚平市民協働環境部長】

- ・移住される方の心配事の一つに、地元の皆さんに受け入れてもらえるかということがある。市が移住政策を進めるうえで地域の皆さんにご協力いただく部分もあるので、今のような事例を参考にさせていただければと思う。

【塚平市民協働環境部長】

- ・この移住実績については、結いターン移住定住推進室に相談があって移住された方の実績なので、実際にはUターンの方が多くと思う。
- ・これまで地域振興住宅や近居同居支援事業補助を活用してもらうなど住環境をきちんと整備したうえでUターンを促進してきた。一方で、飯田の魅力や資源を発信するとともに空き家を紹介するなど田舎暮らしに興味を持たれている方を呼び込む取組を進めている。また、受け入れる側として、各地区の皆さんに態勢を整えていただき、20地区の個性を活かしたマッチングが可能とな

っているので、Iターンが増加していると分析している。

【塚平総合政策部長】

- ・この移住実績については、結いターン移住定住推進室に相談があって移住された方の実績である。Uターンの場合には自然に帰ってくる場合が多いので、このような数値になっている。人口の分析を進めているが、時間がかかっている状況である。

【塚平総合政策部長】

- ・人口の推移については、毎年増減があるが、大きな企業が飯田市に立地した年は転入数と転出数の差が少なくなっている。また、転出数の性別や年代を調べたところ、20代から30代の女性の転出が多いという結果が出ている。ただ、あくまでもデータ上なので、細部の理由については分析ができていない状況である。
- ・新規高卒者の地域内就職率を上げるためには、若い方が働く場所が必要ということはもちろんあるが、若い方が働く場所を知らないという側面もある。そのような状況の中で、親も含めて高校生に産業を紹介する取組である「つなぐ事業」や高校生に地元を知り愛着を持ってもらう取組である「地域人教育」など複合的に進めている。
- ・情報発信については、インターンシップで飯田に来られた大学生などの意見も聞きながら、より魅力が伝わるように改善をしていきたいと考えている。

【塚平市民協働環境部長】

- ・Uターン、Iターンで来られた方には、アンケートや聞き取りを行うなど、統計分析を進めている。詳細については改めて委員の皆さんに配付させていただく。

【松下教育委員会参与】

- ・小規模校の多様な学びの環境づくり、不登校の学びの環境づくり、大規模校の共同的な学びへの活用等でICT技術の導入を考えてきており、モデル校を設定して実証研究してきたところである。コロナ禍で導入が早くなったが、計画に基づき進めている。

【杉山委員】

- ・人口の分析が進まないと、どのような戦略を立てればよいかわかりづらいと思うので、ぜひ分析を進めていただきたいと思う。
- ・移住定住に力を入れて、効果も出てきていることはわかるが、転入数と転出数の差がずっとマイナスになっており、この2年ほどは転出数が400人ほど多い状況にある。この分析がされていれば教えていただきたい。
- ・新規高卒者の地域内就職率や新規大学等卒業者の地域内就職率を上げるためには、地域の魅力を高めるということだけではなく、若者が働ける産業がないと地元に残れないので、産業分野としっかり連携をとって対策を進めていただきたいと思う。
- ・地域の魅力を高めるという点では、飯田市の本質の部分を磨くことが大切だと考えている。国内どこでも移住者の獲得に向けて競争をしている中で、表面的な部分の情報発信ではなく、飯田市の本質的な魅力の発信が大切だと思う。例えば、名古屋駅の前はどんどん開発されているが、名古屋らしさがなくなり、「リトル東京」だという専門家もいる。公共交通が発達することは多くの人を訪れる半面、多くの人が出ていくということなので、飯田もリニア開通を見据える中で、飯田らしいまちづくりを進めていただきたいと思う。

<基本目標3 “結いの心”に根ざす教育を実践し、豊かな心とリニア時代を生きる力を育む>

【石神委員】

- ・ICT教育については、東京でも混乱している状況がある中で、飯田市では、コロナ禍に関係なく進められてきており、先見の明があるのではと思う。ICT教育についてはコロナ禍に関係なく充実させていく方向か。

【永井委員】

- はじめまして絵本プレゼントやセカンドブックプレゼント等の読書活動について評価できる。ただ、本を差し上げるだけでなく、図書館に並べるなどさらに工夫をしていただきたい。対象の親子だけでなく、多くの人に関心を持ってもらうことが重要だと思う。また、プレゼント後のフォローが大切である。家族みんなで楽しんでいただくことが、他の本への関心を持つことにもつながる。こうした取組で、効率的に効果が得られると期待している。
- ICT教育では、1人1台の配布は良かった。情報リテラシーやモラルの面で苦労されているのがわかり、とても難しい問題であると思うが、事例を踏まえながら研究を進めていただきたい。

【遠山委員】

- 和田小学校を始め、遠山地区では山村留学に力を入れている。上村小学校も特認校制度を採用している。小規模校の取組を教えていただきたい。

【三浦委員】

- はじめまして絵本プレゼントやセカンドブックプレゼント等の読書活動について、子どもたちの発達段階に応じて、絵本に入り込める環境をつくることは教育的意義があると考えている。親子のコミュニケーションを増やす機会としても戦略的に工夫して取り組めたらよいと思う。絵本をプレゼントすることで、親子が同じもので感動する場面ができ、コミュニケーションの一環という面にもつながると思う。
- ICTはツールであり、情報モラルやリテラシーの課題に取り組むことが大切である。使い方に目を向けがちだが、問題が発生した場合、その原因、道徳的などところに目を向けるべきである。
- 「ふるさとへの愛着」は大切なキーワードである。例えば、美術博物館での菱田春草などの展示を学校教育に取り入れられたらよいと思う。地域に貴重な資源があることを子どもの頃から知ってもらうことで、それが地域への愛着に繋がり、地域外へ出たときに自分の言葉で語れることにつながると思う。また、興味が深まれば、研究を志す人材の育成にもつながる。その時々教育課程に織り交ぜていくことが重要である。

【松下教育委員会参与】

- 小戦略そのものに記載はないが、中期計画の基本目標3の大きな課題として捉えている。魅力的で個性的な学びの環境をつくることと、学校配置の枠組みを検討することが大きな2つの柱である。遠山郷3校での特徴的な学びと、子どもが減少していく中での学校の枠組みについて、地域と一緒に検討させていただきたいと考えている。非常に重要で重点的な課題と捉えている。

【松下教育委員会参与】

- 親子のコミュニケーションを深める意図があり、その意図を明確にして取組を進めていく必要がある。例えば、教育委員会では我が家の結いタイムを進めているが、本を介したコミュニケーションを意識していくことも必要である。
- 問題が起こった背景、子どもの意識や感情の根っこの部分の深掘りが必要であり、今のご指摘は課題を共有し解決方法を考えていく上で大切な視点であると考えている。
- 菱田春草の偉大さは、日本文化に立脚しながら西洋文化を取り込み、新たな日本文化を確立したところにある。現在でもコロナ禍やリニア時代を迎えるにあたってヒントになることがあると思う。子どもたちの教育の中に提起していくべきと考えている。各学校の美術博物館の展示観覧に併せ、菱田春草の芸術性と生き方を考えるため、事前学習教材を作ったが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大で実施できていない状況にある。

【熊谷委員】

- ・小規模校から進学した場合に取り残されてしまわないか心配である。

【石神委員】

- ・リニア時代は「多様性の時代」である。多様な文化や計画の多様性、進み方の多様性などがある。それにどのように対応するのか。そのモデルが飯田市でできるのではないかと思う。次の時代に向けた教育を考えたときに、キーワードは多様性であり、ゆっくり学ぶ子どもへの教育が重要であるのはもちろん、早く学べる子どもへの教育も重要である。ICTを活用し、個性への対応ができる教育先進地のモデルを目指していただきたいと思っている。都会の塾では、ICT化により個別対応化してきている。誰ひとり取り残さない教育のモデルとして進めていただきたい。

【永井委員】

- ・ふるさと教育の中で、ものづくり地域企業の特徴やエス・バードなど、ものづくりにも光を当ててほしいと考えている。今後、DX人材やSTEAM人材が求められてくる中で、特殊な強みがある飯田市は魅力的になると思うので、研究を進めていただきたい。

<基本目標4 豊かな「学びの土壌」を活かした「学習と交流」を進め、飯田の自治を担い、可能性を広げられる人材を育む>

【遠山委員】

- ・南アルプスジオパークを退会というような報道があった。エコパーク・ジオパークというものを飯田市としてはどう捉え、どのように活用していく考えでいるのか。地理学の教授から、当地域には手付かずの資源があると聞いたことがあり、エコパーク・ジオパークの活用を進めていってほしいと考えている。飯田市には、学輪 IIDA の仕組みもあるので、地理学科やジオに関係する大学と連携を進めていただきたいと思う。

【松下教育委員会参与】

- ・学校の授業は「できる子」に照準が合うことが多いが、意欲や理解度に応じた学びの環境をどう作るかが課題と考える。学校でも家庭でもICTを有効的、実効的に活用できるように考えていきたい。

【松下教育委員会参与】

- ・地育力の捉えの中には、地域に根付いている産業、地域の技術力、それを支える人への気づきなども含まれている。キャリア教育の中では、職場体験に終始してしまう部分もあるため、事前学習・体験・振り返りのプロセスを大切にする中で、「気づき」を促していきたい。

【松下教育委員会参与】

- ・現在は、再認定に向けて日本ジオパーク委員会と協議を進めている。日本ジオパーク認定は、一旦認定を受ければよいというわけではなく、現地での定期的な審査がある。審査によって認定取り消しや、2年間で指摘事項の改善を図り認定継続という場合がある。南アルプスジオパーク認定は、まずは、この地域の皆さんが、地域資源を価値あるものとして認識して、ふるさとに誇りと愛着をもつことが重要であり、それを発信源に、地域内外との交流の仕掛けを起こしていくという2つの軸をもって取り組んできている。日本ジオパーク委員会に飯田市の考えを伝えながら、協議を進めているところである。
- ・南アルプスから天竜川にいたる標高差などの地理的条件は、飯田市の多様な

【熊谷委員】

- ・名勝天龍峡の他に、発信ができるものはどのようなものがあるか。竜東地区は難しいようにも感じる。

【永井委員】

- ・飯田市は地域を学ぶ姿勢があり、活動も活発である。ただ、担い手が高齢化しており、後継者がいないというのが、どの団体でも課題になっている。

【遠山委員】

- ・霜月祭りを担う数少ない若手たちを見ていると、小学校や中学校の頃に祭りを楽しんだ経験があるという印象がある。祭りに限らず、地域に根付いた教育で地域を知った若者が戻っている事例が多く見受けられる。学校教育の中でもさらに力を入れていただきたいと思う。後継者不足という点では、20～30代の意欲ある人が戻ってきていると感じる。地域活動に積極的に参加するまでには難しい部分もあると思うが、まずは、そういった若者の存在があることを知っていただけたらと思う。

【石神委員】

- ・地域資源という面で、霜月祭り自体が偉大な資源であることは間違いないが、それを取り巻く暮らしがあることこそが素晴らしいと考えている。生活や自然環境の中に根付いた文化であり、個々の資源が素晴らしいだけでなく、全体として文化をなしている。先ほどのジオパークの話も、A級だけが評価されるのではなく、B級、C級だからこそその魅力があると思う。飯田には、まさに本物がある。

【三浦委員】

- ・話をお聞きする中で、伝統や文化を外から見ているだけではなく、中に入って自分もそれをつなげていく一人になったときに、大きな価値があると改めて感じた。地域コミュニティの中で、人から人へと伝えられ、尊敬や愛着が生まれ

暮らしや生物の多様性、複雑な景観に表れている。その価値を市民の皆さんと共有しながら、全国へ継続的に発信をしていくよう考えている。

【松下教育委員会参与】

- ・竜東地区は、下久堅の旧瀧澤医院や、上久堅の北田遺跡、遠山の霜月祭りなど、貴重な資源の宝庫である。それを、市民の皆さんにわかりやすく価値を顕在化させていくことは重要な取組と考えている。

【松下教育委員会参与】

- ・大変重要なお指摘であり、顕在化していないけれども重要な課題と認識している。担い手不足という点では、10年後、20年後に大きな影響を及ぼすと考えている。基本目標3に位置づけているが、幼児期から高校に至るまで、ふるさと学習を中核とした飯田型キャリア教育をさらに進めたい。

【松下教育委員会参与】

- ・霜月祭りを例にしても、神社や地区によって考え方は様々あるので、配慮していく必要があると思う。行政では踏み込めない部分もあるが、祭りの所作を映像で記録することは重要と考えている。

【松下教育委員会参与】

- ・石神委員の視点は大切であると考えている。歴史研究所における研究活動では、例えば、本棟造りの家屋の構造やそれを取り巻く環境には、歴史が刻み込まれた景観がある。それが文化財になるということではなく、この地域固有の文化が暮らしの中に豊富にあると考えている。

ることが今後もつながっていくとよいと思う。

<基本目標5 文化・スポーツを通じて人と地域の輝き・うるおいをつくる>

【熊谷委員】

- ・上村では子どもの数が減ってしまい、夜間のスポーツは、ほとんどやれなくなっている。子どもたちがやれるようなスポーツがあればと思う。

【永井委員】

- ・矢高運動場では、サッカーやラグビーなどの活動で賑わっている。中学生が大学やプロの方と連携している取組もある。
- ・施設の話になってしまうが、子どもたちが生の競技を観戦する機会がない。
- ・最近では、地域の方が学校に入ったり、学校の垣根を超えた連携が見られたりしている。さらに進めていただきたいと思う。

【石神委員】

- ・文化と自然が重なり合っているので、考え方によってはおもしろい取組ができる。例えば、飯田には中馬の歴史があるので、高速なリニアで飯田市に到着したら、ゆっくりした馬で移動するといったようなこともおもしろいのではないか。独自の自然や文化を活かしたスポーツを考えていただければと思う。

【熊谷委員】

- ・南アルプス登山で、南信州側の登山道は、大雨が降ると通行止めになってしまう、登山道まで行くことができない。大蔵さんを顧問に迎えたエコ登山では、面平キャンプ場を整備し、そこからのルートができ、良い取組だと思う。

【遠山委員】

- ・大蔵さんと話す中で興味深いと感じたことは、意外と地元の方が魅力に気づいていないということである。その一つの要因として、南アルプスが地元から見えないということがある。あまりに近い山が多すぎてしまい、見てもただの森だと思ってしまう。別の視点を持った外の人と、地元の人が交流することで魅力の再発見がある。

【松下教育委員会参与】

- ・公民館やスポーツ推進委員協議会等で地域の実態にあわせてスポーツを推進していただいている。競技となるとチーム編成が前提となるが、囲碁ボールやボッチャなど、世代に関わらず参加できるニュースポーツに取り組んでいる。

【松下教育委員会参与】

- ・スポーツ観戦について、県内のプロスポーツでも、この地域で見る機会がないことは確かである。リニア時代には、東京や名古屋に短い時間で移動できるようになることもあるので、環境整備については、しっかりと検討することが必要。
- ・地域の皆さんが、中学校の部活や子どもたちの活動をサポートいただいているのは、飯田市の特徴である。令和5年度から部活動の地域移行を推進するよう国が示しているが、全国的にも飯田市は恵まれた環境にあると考える。

【松下教育委員会参与】

- ・遠山郷では、住民の皆さんを中心とした南信州山岳伝統文化の会による「エコ登山」という新しい取組が始まっている。

【三浦委員】

- ・エコ登山をきっかけに、市民が南アルプスの魅力に気づくことができるというのは素晴らしいことだと思う。
- ・日常的な文化やスポーツについては、飯田市は広く、地区ごとに人口も違うので、その違いを認識し、対応していくことが大切であると考えている。また、中学生期のスポーツはとても大切なことだと感じている。子どもたちが、スポーツの楽しさを体験すると同時に、スポーツ障害にならないよう健全なスポーツ活動を行える環境を整えることが重要である。

【熊谷委員】

- ・プロになるようなスポーツ選手は飯田市から誕生しているか。子どもたちが燃え上がれるような指導者も必要ではないか。

【永井委員】

- ・水泳では、高校3年生が全国優勝を果たしている。飯田のスイミングは県下で最もレベルが高く、その指導を受け続けるために、親が転勤しても単身赴任で、子どもは飯田に残るといった事例も聞く。そういった指導者がいらっしやることで、飯田を離れる学生が抑制されたり、或いは移住されたりすることにもつながる可能性がある。

【遠山委員】

- ・遠山郷での生活を考えている同世代と話をしたときに、小規模校だとスポーツの選択の幅が狭いことに懸念があると聞いた。いろいろなスポーツに触れ合え、違う学校の子と一緒にできるなど、非常におもしろい取組だと感じている。

【石神委員】

- ・教育は飯田にとって重要な一番の目玉であると思う。前回、リニア時代の教育はどうなっていくかを議論したが、パラダイムシフトを先駆けて考えることが大切であり、それには、子どもたちに考える力をつける教育を進めていくことが大切だと考える。与える教育ではなく、子どもたちが持っているものを「引

【松下教育委員会参与】

- ・水泳や卓球、弓道、ラグビーなど活躍している学校やスポーツクラブがある。日本におけるスポーツ指導の在り方は過渡期に来ていると考えている。長時間にわたり根性を前面にした指導から、プログラムをコンパクトにして集中力をもって取り組む指導へ変化してきており、それを促すことが、燃え尽きやケガのリスクを減らすことにつながる。飯田市では、スポーツ指導者6箇条を掲げて取り組んでいる。

【松下教育委員会参与】

- ・弓道体験コースのエピソードになるが、スポーツとしてではなく、歴史が好きで弓矢への興味から参加している生徒がいた。体験できる場があることで、子どもたちの可能性を広げていくことができると感じた。

【松下教育委員会参与】

- ・皆さんからご意見をいただく中で、地域を担う人材の育成が大きな課題になると改めて感じた。ふるさと学習を中核としたキャリア教育を通じて、誇りと愛着をもって、地域に貢献できる、あるいは、地域外に出ても地域に関わる人材を育てていく必要性を改めて認識したところである。

き出す」教育を進めていっていただきたい。

<基本目標6 結婚・出産・子育ての希望をかなえる>

【勝野委員】

- ・指標の中で、産みやすいまちだと思う人の割合の基準が 36.6%、目標が 40%とずいぶん低い値となっているが、理由はなにか。

【菅沼委員】

- ・指標の未満児保育の提供（0－2歳児）の値は、どのような考えで目標値を設定しているのか。

【菅沼委員】

- ・労働者団体の目線で見ると、2歳までの育児休業が可能となった現状でもこれだけ保育ニーズが高いところを見ると、育児休業を取得できている家庭層がまだまだ少ないと感じる。
- ・受け皿を準備していただけることはありがたいが、労働団体として育児休業を取得するよう声かけ、働きかけが大切になると思うので、一緒になってこの指標を注視していきたいと考えている。
- ・「事業所における働き方改革を促す」の事業所とは飯田市に事業所をもつ企業のことか、市役所のことか。

【菅沼委員】

- ・多様な働き方がある中で、どのように働きやすい環境をつくっていくのか考えながら取り組むことが、最終的には住みやすいまちにつながっていくと思う。

【松村委員】

- ・看護師は、育児休暇を2～3年取得できる場合もあるが、多くは1年で復帰する現状がある。その中で、働いていなくても子どもを保育園に預けられる仕組みがあるのはありがたいという声が職員から出ている。早くから働きたい人は

【高山健康福祉部長】

- ・市民意識調査の結果で、20歳から40歳代の方の回答の結果であるが、確かに低いと考えている。市の分析では、産める場所が市立病院の一択しかなく、選べないということが一つの要因ではないかと考えている。ただ、不妊治療に取り組み始めてからは、だいぶ値が上がってきたところである。

【高山健康福祉部長】

- ・目標値は定員、実績値は入園数としており、実績値が上回っているということは、定員を超過するニーズがあったということである。定員を超過した人数についても、全て受け入れをさせていただいており、福祉サービスとしてはすべてのニーズに応えられていると考えている。この傾向はこれからも増えていくと考えているため、目標値はより高いものに設定している。

【高山健康福祉部長】

- ・保育園に入れない家庭でなければ、育児休業は1年間取れないといった制度の問題もあり、市では、働いていなくても保育所に子どもを預けられる仕組みとして、保育所型認定こども園という制度を考えている。
- ・働き方改革については、それぞれの職場で取組を進め、育児休暇を取得しやすい環境を目指したい。市から事業所をお願いすることはできないが、事業所を訪問して、ワークライフバランスの状況をお聞きしたり、セミナーや講演会等の周知をしたり取り組んでいるところである。

復帰ができ、もう少し子どもを見ていたいと考える人は、上の子を預けたまま下の子の面倒を見られるようになるという両方の要望をかなえることができる。

- ・育児休暇の取得については、経営者が理解していても、中間層が理解していないと取得できない。

【菅沼委員】

- ・女性とその職場でどのように活躍していくか、しっかりと考える必要がある。

【中田委員】

- ・わたしの会社も古い体質の会社であり、男性が育児休暇を取得することは考えられなかった。1人が育児休暇を取得したところ、そこから何人か取得するようになってきた。そうなってくると、周りの人がフォローするようになり雰囲気が変わった。

【佐々木（美）委員】

- ・介護や福祉の職場は若い女性が多く、現在でも多くの職員が産休や育休を取得している状況である。女性にとっては産んで生活していくうえで、働くということが重要であるが、仕事に復帰したくても子どもの世話などがあり、支援がないと働けない状況である。人材が不足している中で、どのように復帰と休暇のサイクルを支援していくか課題と認識している。
- ・事業所内の保育所を持っているところもあり、保育所を作りたいと思っている事業所への支援はあるか。

【藤本委員】

- ・不妊治療については、より充実した取組をお願いしたいと考えている。
- ・子育てをしている母親の孤立を防ぐということで、「子育て応援隊ふわり」というグループがサポートしている。市からの支援を検討いただけないか。

【藤本委員】

- ・結婚相談員への支援についても検討いただけないか。

【高山健康福祉部長】

- ・未満児保育のニーズはこれからも高まっていくと考えられる。それぞれの事業所で保育ルームができれば安心でき、そのような多様性が大切だと考えている。地域の子どもを預かっていただくという前提であれば、保育園と同じように運営費が出る仕組みがある。ただ、保育士がいないという課題がある。

【高山健康福祉部長】

- ・「子育て応援隊ふわり」の皆さんについては、今年度はムトス飯田助成事業を申請いただき、支援させていただいている。つどいの広場等との協力について相談させていただくとともに、活動の配信について検討をさせていただきたい。

【高山健康福祉部長】

- ・結構相談員は結婚の相談だけでなく、さまざまな悩みを受けていただいております。重要な役割を担っていただいていることは承知している。活動費等については検討をさせていただきたい。

【勝野委員】

- ・「飯田の持ち味を活かし、豊かな育ちを支える」の中の「いいだ型自然保育」はぜひ進めていただきたい。

<基本目標7 「市民総健康」と「生涯現役」をめざす>**【佐々木（美）委員】**

- ・口腔ケアについては、具体的にどのように進めていくのか。
- ・地域包括支援センターが果たす役割において、介護予防や健康寿命の延伸など一定の効果が出ていると考える。飯田市の基幹包括的な福祉の充実を願っている。

【佐々木（美）委員】

- ・人材の活用という点では、高校生のアルバイト雇用や、妊娠出産で一度職場を離れた人の支援などの可能性を探ってはどうかと思う。資格が必要な仕事はハードルが高いので、無資格でもできる仕事の支援をしていきたい。

【松村委員】

- ・通所型の介護に通うことが楽しみだという声を聞く。期間が決まっているということだが、続いて通えるような仕組みにできないか。
- ・いきいき教室と一緒に取り組めるといいが、それをコーディネートする人が必要となってくるため難しいと思う。

【勝野委員】

- ・日本一健康寿命が長いまちを目指してもらいたいと考えている。データベースを使って飯田市民全員の健康管理を一括で行えないか。
- ・国民健康保険加入者の特定健診受診率の目標が50%に設定されているが、この程度ではなくて100%を目指してはどうか。

【中田委員】

- ・消防団への健診は働き盛り世代の健康づくりにとても良い取組だと思うが、飯

【高山健康福祉部長】

- ・後期高齢者を対象とした保健指導の中で、運動・栄養・口腔等の相談・指導を行うとしており、現在は人的体制を整えることが重要と認識している。今後さらに取組を進めていく必要があると考えている。
- ・基幹包括については人的体制を充実させて、訪問活動を中心に取り組んでいる。地域包括についても、飯田市の中で5か所、6か所というのは少ないと考えており、7圏域に分けて行えるようにしていきたい。人材確保が大きな課題であり、互いに知恵を出しながら進めていきたいと考えている。

【高山健康福祉部長】

- ・施設介護の場合、周辺部分をロボット化することが可能だと思う。例えば、ロボット掃除機を導入することにより、その時間を介護に費やすことができる。ロボットに介護をさせるという話ではなくて、周辺部分に活用できるのではないかと考えている。

【高山健康福祉部長】

- ・多くの人に参加していただきたいという側面もあるため、現状の仕組みでご理解いただきたい。ただ、続けるということの大切さも理解しており、考えていかなければと思う。

【高山健康福祉部長】

- ・プライバシーの問題もあり難しいが、分析する際にデータを用いている。
- ・飯田市ではかかりつけ医を持っている方が多く、そういった数字を把握しながら、健診の受診率について考えていきたい。

【高山健康福祉部長】

- ・飯田市と周辺の町村で行われている取組である。全国的に見た場合は、地域独

田市独自の取組か。

【菅沼委員】

- ・これから労働人口が減少していくといわれている中で、働きたいのに働くことができない状態になってしまうのはもったいないと思う。市と企業が一緒になって取り組んでいることをもっと広報していただきたい。

【藤本委員】

- ・新型コロナウイルス感染症対策の推進として予防接種事業は今後も続いていくのか。感染者が出ていない状況が続いているが、対策としてはうまくいっていると捉えていいのか。

【菅沼委員】

- ・ワクチン接種は中部公衆医学研究所のみで、枠も限られている状況だが、枠を増やしていくということか。

【勝野委員】

- ・地域健康ケア計画は今期の計画にどのように反映しているのか。
- ・長野県に「信州ACEプロジェクト」という計画があり、健康長寿世界一を目指すというタイトルになっている。世界一に向けた取組をぜひ「いいだ未来デザイン」に盛り込んでいただきたい。

<基本目標8 共に支え合い、自ら行動する地域福祉を充実させる>

【松村委員】

- ・障がい者の社会参加を進めると聞くと、事業への参加者を増やす取組に聞こえる。誰もが暮らしやすい社会といったときに、社会参加を促進する事業とはどんな場面を想定しているのか。
- ・障がいをもっていない人達が障がい者に対して理解を深めないと、孤立してしまう。場面があっても、周りの人に理解がないと馴染んでいくことはない。障

自の取組と考えられる。

【高山健康福祉部長】

- ・行政としては手が届きにくい分野であるが、健康づくりの意識啓発を事業所と一緒に取り組んでいきたい。

【高山健康福祉部長】

- ・3回目の予防接種の話が出てきているが、具体的な通達がない状況であるため、情報を収集しているところである。
- ・1回目、2回目のワクチン接種を希望している人がいるため、希望者に対して引き続きワクチン接種を行っていく。
- ・水際対策や検査の連携体制により、感染のリスクを抑えることができていると考えるが、油断はできない。検査キットの活用、連携体制の強化、ワクチン接種といった取組を着実に実施していくことが重要だと考えている。

【高山健康福祉部長】

- ・ワクチンの供給がないと接種ができないため、まずはワクチンを要求していくことになる。飯田市に供給を受けた分はすべて予約で埋まっており、さらに予約の希望があるため、供給していただくよう圏域間の調整を行っている。

【高山健康福祉部長】

- ・地域健康ケア計画は、前期計画では分野別計画という位置づけの中で毎年見直しをしてきたところである。中期計画においては、いいだ未来デザイン2028の基本目標に包括されるものとして統合して、内容を戦略計画に反映している。

【高山健康福祉部長】

- ・パラリンピックがユニバーサルデザインを理解するうえで、効果的であったと思う。障がい理解しようとする機会として捉えることが大切であると考えている。
- ・今年は、芸術祭の開催や事業者向けに作成した物品販売や役務提供を案内するチラシを作成している。障がい者スポーツの指導者資格を職員に取得して

がい者のことを理解していくという場面を多くもってほしい。

【松村委員】

- 障がい者スポーツも競技として行うことはできるが、障がい者が参加しなければ障がい者との交流はなく、障がい者への理解にはつながっていかないと思う。一緒に行くという取組を考えていただきたい。

【中田委員】

- 何をすればよいかということがわからないと、関わることは難しい。普段生活している日常の中に、障がい者と関わりが持てる場があるといいと思う。

【勝野委員】

- 地元でまちづくりを考えたときに、高齢者の生きがいと子どもの居場所づくりが課題としてあった。その時に空き家を借りて、高齢者が駄菓子屋を開き、子どものたまり場にしようという提案があった。障がい者についても同様な視点でなにか考えられないか。

【菅沼委員】

- 地域内でのつながりということを考えると、新しく移り住んできた人達にどのように地域で活動してもらうかということが、地域福祉の充実につながるのではないと思う。

【松村委員】

- 組合に入ると何かいいことがあるのかという意見もある。

【中田委員】

- 仕事の場でもどこでもメリットの有無が重要視されている。

【松村委員】

- 今は保育園も好きなところを選ぶことができるようになっており、子どもを通

もらい、火付けをしたいと考えている。

【高山健康福祉部長】

- 魅力的な提案であると思う。高齢者が子どもの見守りや居場所を提供することで、自身の介護予防にもつながる。そういったことが地域共生社会の一つのポイントだと思う。
- 障がい者ということを特別に考えなくても、足が悪いお年寄りがいたり、なかなか落ち着いて座ってられない子どもがいたりする。そういった人たちが一緒に生活していくことがユニバーサルデザインではないかと考えている。

【高山健康福祉部長】

- 地域としては組合に加入してもらうことが一番の願いだと思う。引っ越しをされてきた方は、ごみの出し方等わからないこともある。そのような時に地域の方が教えてくれて、徐々に地域になじんでいくというはあると思う。
- 子育て中の家族であれば、公園デビューのようなことを支援するために、つどいの広場を開催するなどの取組を行っている。

【高山健康福祉部長】

- 勤めの人が多く、地縁がなくても暮らせてしまう現代では、なかなか組合加入は進んでいない。子どもを通じた付き合いが今は多いと思う。

じての関わりも小学校のPTAからという印象がある。

【中田委員】

- ・都市部では深刻な問題であり、隣に住んでいる方と初めて会話するまで、住み始めてから何十年経ってからのということもある。困ったときに初めてメリットがわかる。

【松村委員】

- ・地域福祉課題検討会も定期的に会議があるわけではないため、課題解決にはつながっていないと考えている。
- ・地域福祉コーディネーターもまだ地域に根付いていないと思う。

【勝野委員】

- ・民生委員の負担が非常に多いと思う。最低限の手当を出すなど考えていただきたい。

<基本目標9 20地区が輝く生き活きとした地域づくりを地域主体に進める>

【佐々木（崇）委員】

- ・内容としては素晴らしいと感じるが、この基本目標に対して指標が適切か疑問を感じる。人数だけでは測れなかったりするので指標の設定は難しいと思うが、住民の皆さんが各地区で様々な取組をしているので、そのような活動を指標で表せられれば良いと思う。市内20地区がそれぞれ個性ある活動をしているので、一律な指標ではなくても飯田らしい指標を考えられればと思う。

【福岡委員】

- ・空き家の活動は大切だと考えており、今後いかに空き家を活用していくかということが重要なテーマだと思う。
- ・災害が多い地域に新築の住宅が多く建っているのを見て、今後の気候変動を見据えた時に災害もより深刻になるのではと心配している。災害に強い地域づくりや都市計画を考えていく必要があると思う。

【下平委員】

- ・空き家対策については、持ち主の方にご協力をいただかないと地区だけでは大変難しい。個人情報の壁がありなかなか進まない。

【高山健康福祉部長】

- ・困りごとを一緒に見つけることにより、まとまりが生まれるのではないかと考えたのが、地域福祉課題検討会である。

【高山健康福祉部長】

- ・地域福祉コーディネーターは、それぞれの地域の福祉課題や困りごとと人とを結び付ける役割を担っており、中期計画の取組の中で進めていく。

【塚平市民協働環境部長】

- ・それぞれの戦略の中で取組を記載しているが、指標に取り入れるのは難しいと感じている。ただ、重要なご意見なので、形にできるかどうか検討したいと考えている。

【塚平市民協働環境部長】

- ・空き家の活用を進めている一方、特定空き家といった危険な空き家がたくさんあり、その対応を急いで進めている。持ち主の方や地域の理解が非常に重要であり、少しずつではあるが件数が伸びてきているところである。

- ・鷺流峡復活プロジェクトについては、NPOを立ち上げるため申請しているところである。地域振興の取組ということもあり横展開できればいいと考えている。
- ・自治会への加入が大きな課題と考えている。みんなが地域を守るという意識で取り組む必要がある。

【杉山委員】

- ・福岡委員のご意見に関連するが、ゾーニングの考え方が重要だと考えている。飯田市全体の将来についてしっかりと考えて、開発する地域と開発しない地域、この地域はどうするといったことを区分けして考えていく必要があると思う。飯田市の未来像を持ったうえで、バックキャストの考え方で今どうしていくか考えるべきだと思う。
- ・飯田市の魅力の一つが住民自治だと考えている。住民自治を一から作るのに苦労している自治体が多い中で、飯田市はそれが確立されており、大きな魅力だと思う。
- ・佐々木委員もおっしゃっていたが、わかりやすい指標があってもいいと思う。
- ・空き家の活用についてはいろいろな考え方があると思う。空き家の改修にあたりゼロエネルギーが可能かどうかという視点があったり、一人が所有することではなく、みんなでシェアするという視点があったり、生活の場ではなくオフィスとして使うという視点があったり、さまざまなアプローチが考えられると思う。

<基本目標 10 個性を尊重し、多様な価値観を認め合い、活動の場を広げる>

【本田委員】

- ・飯田に住んでいる外国の方の比率は、以前はブラジルや中国の方が多かったが、最近ではベトナムの方が増えてきた。就労や研修という方が多く、企業も積極的に受け入れていただいているが、ベトナムの方もまだまだ経験が浅く、受け入れ側でも困っているという話を聞く。ただ、その中で飯田市の行政の支援は手厚く、外国の方も不満より感謝の声をより多く話される状況にある。引き続き外国の方の不安を解決していくために支援をお願いしたい。
- ・飯田駅前に駅前プラザができて、公民館の移設や国際交流推進協会の拠点を設けるなど交流の場が期待される。わたしたちも行政と一緒に取組を進めたいと考えている。

【塚平総合政策部長】

- ・飯田市の都市計画はあるが、リニア開通を見据える中では、周辺の町村も含めて南信州全体のゾーニングを考えているところである。リニア駅周辺には、ゼロカーボンエリアやシェアオフィスの設置などモデル的な取組も検討されている。

【塚平市民協働環境部長】

- ・通訳の配置や学校教育における日本語教育の推進など充実を図っているところであり、多文化共生機能の拠点として駅前プラザを有効に活用できるよう体制を強化するなど取組を進めたいと考えている。外国の方と日常的に交流できるよう国際交流推進協会の皆さんと一緒に取組んでいきたい。

【福岡委員】

- ・男女共同参画に関するセミナーに参加する機会があった。その中で、例えば、バブル世代やZ世代など世代を一括りにして考えるなど、誰しもが先入観や思い込みによる差別があることを知り、それを壊すのが男女共同参画の第一歩だということを学んだ。

【福岡委員】

- ・企業でも男女間に限らず、多様な考え方が求められていると思う。例えば、月に1回ある会議を1時間に設定した時に、議題が多くても少なくともみんなが1時間を守ろうとする。30分で終わる議題であれば30分で終わらせればいいのに、1時間やってしまうことはよくあることだと思う。制約を勝手につけているので、多様な考え方を持つことは大切だと感じた。

【杉山委員】

- ・このような会議の場に参加させていただくことがよくあるが、女性は1人だけということが多く。その場で男女共同参画について議論をするのに違和感がある。男性の皆さんが女性だけの会議に1人で参加することを想像していただければわかりやすいと思う。
- ・ある自治体の会議に参加した時に、職員が全員男性ということがあった。そのような場に女性職員も参加し、経験して育てるという視点を持つことが大切だと思う。飯田市もそこまでではないが、女性が少ないので改めて考えていただきたいと思う。
- ・女性ということだけでなく、若い世代の皆さんにもさまざまな経験を積んでもらい、人材を育てていくということが大切と考えている。

【本田委員】

- ・指標の中に、市役所の係長相当の職責の女性比率があり、目標を約4割に設定しているが、やはりできるだけ高くなる方がいいと思う。女性が働けるということは、子育てもしやすいということにつながると考えている。それは飯田に住んでみたいという気持ちにつながると思う。目標を約50%に設定して積極的に取り組んでいただきたい。

【下平委員】

- ・本田委員の意見に賛同する。やはり市役所で女性が登用されてくると、女性目線での政策も増え、共感を呼びやすいのではないと思う。

【塚平市民協働環境部長】

- ・議会でも取り上げられているが、ワークライフバランスも含めてジェンダーに関して、自分の認識を確認しながら考えていく必要があると感じている。地道に啓発に取り組んでいるところではあるが、企業の皆様にもご協力いただきながらご意見をいただきたいと思う。

【塚平市民協働環境部長】

- ・職場内の女性と意見交換すると、家庭で子どもを見たり親の介護をしたりという話が出てくる。仕事との両立は厳しく、職責を果たす自信がないということである。やはり家庭内でも家事の分担など家族で話し合ってもらい、市役所職員が率先して考えていく必要があると思う。

【塚平総合政策部長】

- ・女性の方にやってもらおうことを考えるのではなく、男性がやっていることを女性にやってもらえばいいのではと思う。

- ・地区の会議でも女性の委員を増やそうとしているが、数を増やそうとするばかりで、中身の議論に至っていない。無理やり女性の人数を増やすということではなく、女性が自主的にやってもらえるように考えた方がよいと思う。また、女性が参加したくても家族に遠慮してしまう場面もあると聞く。

【杉山委員】

- ・女性だから男性だからということではなく、一人の人として考えればよいと思う。
- ・コミュニケーションが大事であり、話をしないとお互いの考えを理解できないと思う。今は、発言を気にするあまり、人と人との関係が薄くなるのを危惧している。性別や世代に関係なく、互いにコミュニケーションをとり共感する社会が広がるとよいと考えている。

【下平委員】

- ・多様性はさまざまな考え方があり、多くの方と時間をかけて議論をする必要があると思う。

<基本目標 11 地球環境への配慮が当たり前の暮らしとまちづくりの推進>**【本田委員】**

- ・国内で見ると債務が超過しており、さらなる消費の拡大や生産性の向上を進めるということだが、経済成長と二酸化炭素の削減は反比例するものだと思う。経済が滞ってはいけないが、それぞれが思う存分、自分たちの欲求を満たすということではなく、腹八分目の生活を考えた方がいいのではと思う。
- ・飯田市でも環境についてしっかりと取り組んできているが、環境文化都市と言えるかどうか改めて考えた方がいいのではと思う。行政が腹八分目の生活というのは言いづらいことだと思うが、市民も含めて考える機会ではと思う。

【下平委員】

- ・オイルショックの頃は夜ネオンが消えていたり、ガソリンスタンドが休日は休みだったりしていた。現在は都合のいい生活に慣れているので、市民も普段の生活を見直すということは大切だと考える。

【杉山委員】

- ・国際社会も日本も脱炭素社会を作るということを目指している。そのためには、

今の延長線上で取り組んでも難しく、発想の転換が必要になっている。今の便利で豊かな生活は化石燃料を使って作られてきたが、その化石燃料を使わないようにするという事なので、仕組みを抜本的に変える必要がある。

- ・飯田市は他の自治体と比較すると先進的な取組を行っている。新たな課題を解決していくような施策を進めていただきたいと考えている。
- ・経済成長することを目的にしない方がいいと考えており、いいだ未来デザイン2028に『「くらし豊かなまち」をデザインする』と記載されているが、まさに暮らしが豊かになることが大切だと考えている。今は二酸化炭素の排出を抑えながらGDPを上げることが可能である。飯田市としても二酸化炭素の排出を抑えながら豊かな暮らしができるまちづくりを進めていただきたい。
- ・二酸化炭素の削減は大事な目的であるが、市民の皆さんが取り組んだ結果、二酸化炭素が減ったというような捉えをすることが大切だと考えている。

【福岡委員】

- ・自分の企業でも大手企業から二酸化炭素を前年比3%削減するよう伝えられており、非常に高い目標だと感じているが、周りも含めて環境が変わってきていることを認識している。
- ・事業者も再生可能エネルギー、特に太陽光パネルの設置に取り組んでいるところが多い。ただ、全体的に再生可能エネルギーの需要に対して供給量が少ない状況だと感じている。
- ・この基本目標の小戦略に「地域の経済界、金融界、環境関連の市民組織とともに、グリーンリカバリーを踏まえた環境と経済をテーマにしたプラットフォームの構築を進める」とあり、異業種のプラットフォームの構築は重要なテーマだと考えている。企業の担当者だけではうまくいかない気がしており、例えば中学生に入ってもらうなどメンバーを選出する際には発想の転換をしていただきたいと思います。

<基本目標12 災害や社会リスクに備え、社会基盤を強化し、地域防災力の向上を図る>

【竹内委員】

- ・戦略計画「基本目標12」の「① 災害情報伝達手段の多様化と避難の実効性を高める」の「(1)」に記載のある率先安全避難者の登録について、大切な取組であると捉えている。令和6年度までに100名とすることを目標に取り組んでいると思うが、具体的にどのような方々に声をかけているのか。

【塚平市民協働環境部長】

- ・環境文化都市を再構築するためのプラットフォームをつくるために、さまざまな業種の方に入ってもらうことが重要だと考えている。今年スタートしたばかりであり、皆さんのご意見をいただきながら一緒に考えていただければと思う。

【田中危機管理室長】

- ・未だ県から具体的な指針等が示されていないが、飯田市は先行的に取り組んでいる。基本的な考え方としては、レッドゾーン（土砂災害特別警戒区域）やイエローゾーン（土砂災害警戒区域）にお住まいの方の中で、自主防災活動等を通じて一定の知識等をお持ちの方に率先避難者として活動いただけるよう

- ・最近の豪雨等は危機迫るものがあり、度々エリアメールがなるような状況になっていることから、高齢者や小さな子どもを持つ親の視点からも、こうした取組は安心につながるものであり、是非、力を入れて進めてほしい。

【筧委員】

- ・飯田市には2,000人程度の外国籍住民がお住まいだが、こうした方々のリスクテイクのためには、普段からのお付き合いや関係構築が重要である。学校教育等の場面でこうしたことを学ぶ場を作りみんなで考えておく必要がある。飯田市は、日本一あいさつができる「あいさつの町」である。この素晴らしい地域性を外国籍住民の皆さんにも広げ、普段から関係性を構築しておくことが重要である。
- ・素晴らしい取組はみんなで認め合い、それを拡大させていけるような取り組み方をしてほしい。

【森竹委員】

- ・消防団に関して、団員が減少してきていることは事実であろうが、実際の活動に支障は生じているのか。

【北山委員】

- ・豪雨等の際に「これまでに経験のない」というフレーズが良く使われるが、そう言われると「見てみたい」と思ってしまう。例えば、「川が氾濫しそうだ」と言われると見に行ってしまうことがある。そうしたことがないよう河川の監視カメラを設置しそれをいつでも確認できるようなシステムを構築することができないか。
- ・本当の緊急事態ではデジタル機器は使用できなくなることが想定されるが、そうした際には、近所で確認し合い、助け合いが大切となる。一方で、個人情報の保護の観点から、事前に情報が把握できないという課題がある。
- ・情報伝達に関しては、若年層の価値観が変化し続けており、自分の関心のあることしか見に行かないなど、情報の取り方に変化が生じている。情報の出し方、コミュニケーションの取り方に関しても工夫が必要になってきている。

お声がけをすることを考えており、南信濃地区でモデル的な取組ができるよう進めている。

【田中危機管理室長】

- ・大切な視点に触れていただいた。外国籍住民の課題だけに限らず、普段からのお付き合いが命を守ることに繋がると考えている。
- ・外国籍住民の皆さんへの対応に関しては、いただいたご意見を参考に取組を進めたい。

【田中危機管理室長】

- ・今のところは、実際の現場での消火活動や水防活動に支障があるところまでの減少ではないが、このまま減少が続くと支障が出る可能性が出てくる。
- ・現在、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受け活動に一定の制限を加えているが、今後活動を再開した際に、訓練等への参加が減少するなどの影響があることを心配している。

【田中危機管理室長】

- ・若年層への情報の出し方に関しては、SNSの利用など工夫が必要と考えている。

【青山委員】

- ・防災の面では、地域で開催される防災訓練に参加する人を増やして地域の防災力を高める等の重要な施策が位置付けられていると感じている。
- ・当地域の特徴として、中央構造線が通っており、いつこの地域が震源地になってもおかしくないところに位置している。地震災害に限定して言えば、倒れてくるものに潰されることがなければ、命は守られる。
- ・自宅を耐震化し家具を固定して、緊急地震速報を聞いたらすぐに机の下等に潜る、命が守られ怪我をしなければ、次の退避行動をとることができる。命を落とさない、怪我をしないためにどうするのかを含め知識を広く周知していくことが何よりも重要であると感じている。
- ・病院の防災訓練を見学させていただいた。多くのけが人が運び込まれることを想定したトリアージ訓練が行われていたが、こういう事態が起こると、この程度の負傷者が出て、こんな状態になるなど参加者にイメージーションを与えるような訓練を行っていた。地震が起こった時は、こういう状態になるということイメージし、普段から考えておくことが必要で、これが、地域防災力を向上させるポイントになるのではないかと考えている。

<基本目標 13 リニア・三遠南信時代を支える都市基盤を整備する>

【寛委員】

- ・リニア中央新幹線の整備事業の前段の話になるが、北アルプスや中央アルプスの隆起はほぼ止まっており安定していると思うが、南アルプスは未だ隆起が続いているとの話がある。この話が正しいとしたら、どのような対応をしているのか。リニア中央新幹線のトンネル工事を含め安全性に対する取り組みを重点的に取り組んでいく必要がある。
- ・景観保全について、北海道の観光地であるトマムの原生林の中に2棟のタワーホテルが立っている。観光客からすると画期的なこと面白いと思うが、地域住民としては違和感がある。
- ・世界でも美しい街で有名なストックホルムや古都京都などは、市が条例で厳しい景観制限をかけて、美しい街の景観を守っている。
- ・リニア駅周辺にもこうした取組が必要ではないか。また、その取組を周辺の町村にも広げ、地域全体で景観を守っていく取組が必要ではないか。

【田中危機管理室長】

- ・災害が起きた際に、自分がどのような行動をとればよいのかを一人ひとりが把握していて、その行動をとることができることは重要なことである。訓練を重ねること、市民の皆さんに知識をつけていただくための啓発活動などは、これまでも力を入れてきたところであるし、今後もさらに力を入れて進めていきたいと考えている。
- ・病院に関しては、これまで連携して訓練を実施したことがない。この点に関しても今後検討していきたい。

【細田リニア推進部長】

- ・リニア中央新幹線の本体工事は JR 東海が国からの認可を受けて進めており、工事前に国が環境への影響等を含めて調査を十分に実施している。この中でも、長大トンネルに関しては、極めてハードルが高い状況ではあるが、技術革新等を踏まえ可能であると判断され、実施されているものと認識している。
- ・地域の皆さんに心配や不安があることは承知しており、引き続き、具体的な対応策の提示等を含めて、JR 東海に対して働きかけや問合せを行っていく。
- ・景観保全に関する点は、極めて重要なところであると認識している。
- ・駅本体を単独で取り上げると、伊那谷らしさを表現できるよう考えている。
- ・景観は地域のステータスであると捉えており、施設のあり方、ソフト面も含めて、地域として考えて打ち出していく必要があると考えており、そうした景観に配慮した施設づくりをすることで、その訴求力を高めていけると考えており、引き続き、景観への対応を進めていく。
- ・市では、広告に関する規制や地域住民との景観協定を締結するなどの取組を進めてきている。リニア駅前に関しては、上郷地区の地域計画があり、高さ制限をしており、市もともに取り組んでいるところではあるが、一方で、民間の

【竹内委員】

- この4年間で、非常に多くの事業や取組が進んでいると感じている。特にハード面では、多くのご苦勞があったのではないかと推察する。
- これからの4年間は、新しいものを創造することの難しさ、また、全員合意で事業を進めることの難しさを伴いながらの事業推進になると思うが、だからこそ、「あるべき姿」を定め、そこに向かって進んでいくことが大切であると感じている。
- 所属する組織でもデジタル化は1丁目1番地といっても過言ではないほど重要事項となっている。特に、デジタル人材をどのように育成するのか、専門部署を設置するのかなどは大きな課題である。中に人材がいないと外の意見に影響されすぎてしまう危険性もあると感じている。

【青山委員】

- リニア駅やその周辺の整備に際しては、地域の住民の寄り付きが良く、且つ、観光等でこの地域を訪れる方の寄り付きも良いという視点が大切だと感じている。
- リニア中央新幹線は移動時間を短くするが、視点を変えると他県の駅と飯田市にある駅との差、ブランディングが必要になると考えている。
- これまで飯田市に来たことのない方が、身体一つで来て、スマートモビリティで飯田駅へ移動しそこから天龍峡へ移動してりんご狩りを楽しむなど、自動車運転免許書を持っていなくても楽しめるような面的な展開、2回、3回と訪れてもらえるようなリピーターを確保できるような展開ができる場になるといいと考えている。ここでしかできない体験をしてもらい、その様子をSNS等で拡散してもらうようなことを構想すると良いと考えている。
- スマートモビリティは、数年すると一般的になると考えられる。維持管理がローコストになるとのことだが、どのような意味でローコストなのか。

【高橋委員】

- 今後、この地域ではリニア中央新幹線の開通、三遠南信自動車道の開通などが控えており、観光の分野からもいろいろな視点で考えることがあるのではと感

力をお借りしながらのまちづくりとなるためのバランスを取りながら進める必要がある。

【細田リニア推進部長】

- デジタル化に関しては、重要な行政課題であると認識しており、人材育成も含めて、今後、どのような体制で取り組んでいくのかを議論しているところである。

【細田リニア推進部長】

- リニア駅は、交通の結節点としての機能を整備する必要があるが、それだけではなく、長野県唯一の駅として飯田下伊那の魅力に加え、長野県の魅力をどのように発信できるのかも重要な視点である。
- 訪れる方の目的は、観光、ビジネスあるいは移住を目指してなど多様で、この地域の多様性や多様なライフスタイルを可能とする地域であることを魅力として発信できる施設にしていくことが必要である。情報発信手段としての、デジタルサイネージやSNSの活用なども考えていく必要があると感じている。
- スマートモビリティは、技術革新を含めるとローコストとは言い難い面がある。リニア駅ができるまでの間に、自動運転の技術が確立される可能性は見込めないこと、その後も、新たな技術が生まれ整備したものが陳腐化してしまうことも考慮すると、完全なものを整備するのではなく柔軟性や余白を持たせた整備をしていきたいと考えている。
- EVバスの運行に関しては、スマートモビリティの1つの手段でもあるが、レジリエンス面からも活用できる資源であり、広い視点で検討していきたいと考えている。

じている。

- 先が見えないことに対応するのは難しいことで、新型コロナウイルス感染症の影響がここまで大きくなることは全く想定しなかった。テレワークの普及やインターネットを使用した会議など、人が動かない時代に、何十年もかけて形にしてきたリニア中央新幹線の開通を、どのように取り込むのか、どのような効果を求めていくのかは、非常に骨の折れることだと感じている。
- 観光分野からは、2次交通の在り方が非常に気になる部分である。半年先に控えている元善光寺の御開帳について、リニアの本体工事等の影響をどの程度受けるのか、元善光寺までのアクセスをどのように構築すればいいのかなどが課題となっている。
- 都市基盤としての2次交通を考える際の視点として、いろいろな状況に柔軟に対応できる側面を持っているような基盤とすること、多様な視点で検討することが大切であると考えている。例えば、災害時の人の移送等に应用が利くなど、飯田市が持っている都市基盤の実力や余力がどの程度なのかを整理しながら、事業を進めていくと良いのではないかと考えている。
- タクシードライバーの高齢化が進み、成り手が減っているといった現状をつぶさに観察するなど、身の回りのことにきちんと目を向け、それが今どのような状況か、どの程度の実力を有しているのかを調査・分析し、足りないものを補っていくといった視点を持つことが大切ではないかと考えている。